

英国における幼稚園教員養成機関

わが国の教員養成に資するために

蠟 山 政 道

これは去る十月十日、お茶の水女子大学附属幼稚園遊戯室において行なわれた、蠟山学長の講演を括めたものであります。我が国の教員養成の現状に反省と洞察の機会を与えるものとして、ここに掲載致します。

× × ×

此の夏ヨーロッパに参りまして、暇があったら幼稚園の教育について、どこかで見聞をしたかと思っておりましたが、僅かな期間でありましたし、日程が錯綜しておりまして、僅かに英国で最後の半日を、幼稚園関係の視察に当てることのできたわけであります。それに、がんらい予備知識も十分でなく、僅か二時間位の見聞であります。そこで得た印象を中心にお話してみたいと思います。

フレーベル・エジュケーショナル・インスティテュート

ロンドン市の郊外に、フレーベル・エデュケーショナル・インスティテュートという学校があります。それは英国において最も発達している幼稚園教員の養成所で

あります。名前はフレイベル・エデュケーション・インスティテュートとっているのでありますが、実際にはロンドン大学の教育学部の一部になっていっています。ロンドン大学には他にもいろいろのカレッジがありますが、これはその中の一つと考えればよいわけです。学生の人数は三百人で、三年のコースであります。そして、英国の大学全体に共通の特色であります。レジデンスを中心にしております。つまり学生はみんな学校の寄宿舎に住んでいるわけです。それからチューターの制度を採用しています。このレジデンスとチューターの制度をもっていることが英国の大学の特色とされています。もちろん、一般のレクチャーの制度もあるし、いわゆる一般講義もだんだんふえてきて、チューターの割合は減少しております。ロンドン大学、オックスフォード、ケンブリッジなどの古い大学も次第に近代化して、新しい一般講義を中心していく傾向が見えますが、このフレイベル・インスティテュートは、古い制度にならって、レジデンスで制度もあって、同時にチューターをかなり多く採用しています。

このフレイベル・エジュケーション・インスティテュートは近所に附属幼稚園をもっておりますが、しかし幼稚園のものとは大学の経営ではありません。ただ大学と非常に密接な関係をもっておりますから、附属機関と云っていいのではないかと思えます。

この学校は、最初から教員養成というはっきりとした目的をもっておりますので、その点でははっきりした職業教育施設であります。またその規模も、三百人の定員といえば、一つのカレッジとして英国では相当大きい方です。イギリスの女子大学のレジデンシャル・カレッジの定員は、そう大きくはなく、大体二百位であります。しかも教員養成を目的として三百人の学生定員を擁しているということは、相当大きな規模と考えられます。建物も独立したのもっており、なかなか立派なものです。

フレイベル・エジュケーション・インスティテュートは、教員養成を目的としておりますから、当然のことですが、卒業生は教員としての資格を得られるように仕組まれています。その他に、英国にはフレイベル・ファウンデーションというものがあって、フレイベルの思想、学説を中心にして、幼児教育の研究をしています。相当古い歴史をもっていて、その団体が幼稚園の先生の資格を与える機関になっております。英国は単にここだけでなく、あらゆる方面にわたって、学校だけが免状を出すのではなく、学校以外の専門職業団体が沢山あって、免状を出しています。この場合も、フレイベル・ファウンデーションがその役目を演じているわけであります。先程も申しましたように、この学校は、教員養成というはっきりした目標をもって、教職につく人を養成すること

を目的としておりますので、従つてその目的に従つて学校のカリキュラムの編成ができてゐることは当然であります。つまり母体である大学自体が一つの独立の目的をもつてゐるのです。教員養成をどこから委嘱されてゐるとか、例えば、現在の我が国のように、お茶の水女子大学に、臨時幼稚園教員養成所が委嘱されてゐるというのではありません。はっきりとした独立の機関だということが、この学校にはつきりした特色ができる理由だと思ひます。

フレーベル主義と英国の幼児教育

この養成所が特にフレーベル・エジュケーショナル・インスティテュートという名前をもつてゐるのは、もちろんフレーベルの学説に大きな影響をうけてできたためであります。つまり、フレーベルの学説を基礎として、英国の経験において幼児教育の理論と実際を發展せしめてきたということができるといふ。私はフレーベルの学説はよく知りませんが、でも、一般に伝えられてゐるところによりますと、フレーベル主義の教育はドイツでは非常に狭く解釈され、キングダーガルテンというものに限定して考えられてゐるようでありますが、英国ではそうでなくて、もっと教育全般にわたつて広く解釈し發展せしめてゐるようです。

英国の幼児教育制度は大変複雑でありまして、ナースリースクール、インファントスクール、ブライマリースクール等

いづれも重複しながら並立しております。ここでフレーベル・エジュケーショナル・インスティテュートの学生が、將來従事する教育対象の年齢範囲は相当広いようでありまして、二才から十一才までにわたつております。そして学生もそれに従つて専攻が分化しております。すなわち、第一部は二才から七才までの子どもを対象とするもの、第二部は五才から九才までの子どもを対象とするもの、第三部は七才から十一才及びそれ以上の子どもを対象とするものとなつてゐます。したがつて専攻の選び方によつては、小学校の免状とも重複してくるわけであります。この点、学校制度の違ふ日本とは、大分事情が異なります。

此の養成所に、フレーベルという名前がつけられてゐるもの一つ理由は、幼児の人間としての成長という考えを中心として教育理論が立てられてゐるということ、つまり全人間というものを教育の対象と考へてゐるというように解してよいでしょう。フレーベルの人間教育という大きなアイディアをもつとして教育課程も仕組まれてゐるように思われます。こういうように、フレーベル主義の教育というものが、英国では相当に広い巾をもつて考えられてゐるという特色があることを知つたのであります。その根本理念が、三年コースのこの学校の教育課程を編成していく基本になつてゐると思ひます。そこで次に三年コースの此の学校の養成課程をお話

し致しましょう。

教員養成の課程

先づ第一に、この養成機関、フレールベル・エジュケーシヨナル・インスティテュートは、ロンドン大学の教育学部に相当するものの一環であるということから、ロンドン大学の一般方針に合致しつつ、そこに幼児教育という限定を加えて、このカレッヂの特定の目的、すなわち、保育に従事する人を養成するという目的を実現しようとしていると考えることができるでしょう。従がって、その意味の職業教育を行なつて、この職業に従事するに足る能力と資格を与えるということが目的であります。そして、それに該当するカリキュラム、コースが考えられてくるわけです。

三年課程のコースは、先づ大ざっぱに分けて三つの部分から成り立っています。第一はプロフェシヨナル・コース、すなわち教育専門課程で、これは教職に従事する人が、理論的にまた實際的に、最少限度に持たなければならぬことがらは何かということにもとづいて作られています。その内容としては、教育の原理(心理学を含む)、教育実習、健康教育、教育理念の歴史、体育、宗教教育が含まれています。第二は、カリキュラム・コースといわれるもので、専門の教科に関する事柄が、教える対象児童を考慮して教授されるのであります。その内容としては、美術及び工作、地理、歴史、数学、

音楽、博物学、宗教に関する知識、英語となつております。更に第三に、特殊課程といわれるものがあります。これは、将来教職に従事する学生でも、年令的には十八才から入るわけですから、人間としてはまだ未完成で、その人たちの一般的な能力と教養を伸ばす必要があるわけです。それと同時に、元来、学生の個人々々には、それぞれ特殊の趣味もあるし、信念もあります。要するに人間としてのびてゆくために、特別にその個人に合致したコースを必要とするでしょう。そこで三年のうちのある期間を、職業教育としては直接に関係はなくとも、その人に特に適した分野で、特殊な研究をするように仕組まれているのが、この特殊課程であります。或る場合には、技術的に相当堪能な力を持ちうる程の訓練が施されます。この課程の内容として用意されているものは、美術(絵画及び彫刻)、英語及び英文学、地理学、歴史学、数学、音楽、博物学、陶器及び図案、宗教知識、織物で、学生はこの中から一つを選択して、一学年の後期から卒業まで継続して研究する機会を与えています。この点は又後にとり上げましょう。

第一と第二の課程では、教職のための職業教育という点が重視され、たえず、教育的にどういふ関連をもっているかという観点からとり上げられます。例えば、健康においては、衛生学とか、医学とかがとり上げられますが、それぞれの専

門分野の詳しい研究をするわけではありません。あくまで幼児教育というプロフェッショナルの目的でやるのですから、例えば衛生医学でも幼児の顔色をみて健康状況を判断するか、幼児のかかりやすい病気の早期発見をする能力を養うというようなわけです。又同時に、学生自身の健康、体力を養成することと共に、それがレクリエーションもかね、同時にそれによって、幼児の健康、体力をいかにして維持するかということも学生自身が認識するわけでありませう。こういう風に、教職ということが中心になると云っても、それは相当に広い巾をもった観点に立っているようであります。

この教職のための技能を充実させてゆくために必要なコースも、その中で学生が興味を感じれば、更に別の方向に伸ばしてゆくことができます。例えば心理学を学んでいるうちに、社会的な環境という問題に次第に興味をむいてくれば、社会とか或いは社会問題とかに関係せざるを得ないわけで、それは教育学の範疇だけではやってゆけないことになり、その方面のことを学ぶ機会が与えられます。又地理を例にとっても、教職の目的のためには、幼児が土地の距離をどうしてはかるか、などの如く、子どもに教えるのに必要な知識を教えればよいわけですが、学生が地理に非常に興味をもった場合には、学生自身のために、そういう研究に時間を与えている特殊課程と結びつきます。幼児教育に直接に関係があると

いうことだけを考えるならば、絵画、音楽、動植物等、それぞれ一応の知識をもっていけばこと足りるでしょうが、更に学生の個人個人の人間的要求を満足させるために、それらは更に特殊研究として伸ばされるようになっていくわけです。私はこのような教育課程の仕組みを大変に面白いと思えました。

非常に短い時間でしたが、その学校の本館を中心として、キャンパスの中に、いろいろ特別教室があることに気がきました。絵画、工作、粘土細工、織物などのために特別な部屋がありまして、十分に勉強できるような設備ができています。このような教育課程を見まして、ある一つの英国人気質と申しましようか、ある共通の特色があることに気がつきます。それは、二つの互いに相容れない目的を、理窟なしに調和するという才能であります。プラクティカル・アチャストメントとでも云いましょうか、理窟で割り出していくと、割り切れないものが実際にうまく調和して両立しています。この場合にも、職業教育を行なうと同時に、その人が持っている人間的な素質、能力を活かすということがうまく両立しています。職業教育としての知能、技術を伸ばすとともに、広い意味の人間教育をコースの上で調和してとりいれているのであります。

私は成人教育というものに大変に興味を持っております。

成人教育は、その人が社会的な地位や職業にかかわらずに持っている個々の才能を活かすものであります。それは特殊な人にだけ該当するものではなく、誰にでもそれぞれもっている個性を、興味、能力を伸ばし、それによって人間性を豊かにしてゆくことであります。この意味で、特定の職業のための養成を目的とする場合にも、人間性を満足させ、豊かにさせる人間教育を無視してはなりません。英国ではそこに一つの調和を見出しております。この点は、我々も学ぶべきではないかということをも更めて感じる次第です。

英国の女子教育

英国人共通の特色——矛盾の調和——ということを申したのですが、同様のことが女子教育にも見ることができません。

一たい、女子の大学というものが、男女共学の世の中で、どういう存在理由をもっているのか、男と女と区別して教育することにどれだけ価値があるのか、ということとは現代社会の大きな問題の一つであります。理窟で云えば教育の機会、方法において、男女の間に区別はないはずのものです。しかし、実際には我が国にも、女子大学が存在しています。

私は英国で昔の古い友人達や恩師に久々で会いました。自分は今日本で女子大学の学長をやっていると申しますと、或る人はたちどころにそれは古い制度だ、現代には女子大学などという制度は存在価値がないと申しますし、又或る人は、

それは大変良い制度である、どうかそういう美風を大いに保存し、発展させるようにと、ここでもまちまちの見解にぶつかったのです。しかし、英国では日本のような女子大学の制度はありません。しかし女子教育と男女共学という二つの矛盾することがらを巧みに調和しています。

どういう調和かという点、勉強とか研究とか講義とかいふ点では、男女が機会均等になっていて、全く同じように一緒に学びます。その反面、英国の大学では前にも述べましたように、レジデンスの制度をとっておりますから、カレッジ生活では全く女子だけの生活が行なわれます。そこでは校長先生を始め、書記、小使さんに至るまで、全部女で、男はおられません。徹底的に女子だけの生活をしているのであります。一歩外に出れば、同じ大学の男の学生と一緒に講義もきき、研究もするけれども、カレッジそのものは全く女だけです。これが英国のやり方であります。

我が国では女子大学があって、そこには男の学生はいません。従来で女子大学にきりかわったところでは、入学試験を通うりさえすれば、男でも女でも同様に教育しなければならぬことになっています。ところが実際には、いろいろの面で女子が勉強しにくく、十分にその力を發揮できない場合が多いというのが実状であります。そこでは今の所調和する方法が見つかっていません。そしてそういうような男女

共学の大学と、お茶の水のような女子だけの大学と、二つの違った制度が厳存しているのが日本の現状であります。(制度的にはアメリカもそうですが)これを一体どうして調和したらいいのか、我が国の大学の大きな問題であります。

新制大学における職業教育の位置

此の学校の古いことは及川先生に伺わないとよく分りませんが、とにかくこの学校などは、元は教員を養成する師範学校であったのが、終戦後は、教員を養成するのは此の学校の目的ではないということになったわけです。何故そういう考え方になったかというのと、何か職業的な教育をするということによって、大学教育そのものの価値が低下せしめられるのだという考え方はあるのではないか。もしそうならば、それは必ずしも正しくありません。職業的な教育をしたからと云って、その人間教育がおろそかになるとは考えられません。また、人間教育をしっかり行なう方法はあるということを考えるべきだと思います。

例えばお医者さんとか、弁護士というような職業について、そういう職業につく人を教育するということが、教育の中で占める位置が低いものであるとは私は考えません。むしろ、世の中がだんだんと専門化するときに、職業教育こそ必要なものであって、何故教員を養成する大学の価値が低いのか、その理由が分りません。職業教育をすることが、大学の学問

や研究の自由を向上させてゆくことに役立つこそすれ、学者の研究、或いは調査を低めるものとは考えられません。

英国の場合を考えてみますと、職業教育と学問研究との矛盾というような問題意識すらもっていないようであります。矛盾しないことが当然のことのように考えているのではないかと思います。そういう問題には一度もぶつからなかったのです。

社会意識や社会制度が日本の場合と若干違うので、日本の場合を同じ次元で考えることはできないかもしれませんが、一体、社会がそれ程専門化しない時代には、職業教育が非常に低く見られた時代がありました。また、東洋的な考え方に従がうと、技術とか専門とかいうことは、支配者のやることではないと考えられました。日本の場合には、昔の東洋思想の支配者というような考えから、専門家をいやしめた名残りがあられるのかもしれないと思います。

そもそも大学の伝統としては、クラシックの教育から始まったものであります。それが後に自然科学、技術というようなものが発展して、職業教育が盛になりました。そこでそういう専門をこえた、或いはそれを統合した教育の必要が認識され、その具体化がはかられるようになってきているのであります。

そういう意味で、私は職業的専門教育そのものの欠陥も知

っておりませけれども、それだから職業教育が低いものという根拠は全然ないと思います。

こういう点では、日本の社会には心理的に微妙なものがあ
るようでありませ。よく考えてみますと、われわれは職業を
通じて生活の資を得ているわけですから、職業はいやしいと
いうことを考える理由はないのです。けれども、職業教育は
何となく教育の本道ではないように考える傾向があります。

昔の三年間の専門学校よりも、旧制大学の方が偉いような錯
覚をもっていて、此の頃になって、その誤りがだんだんに分
ってきたのではないのでしょうか。英国では職業教育をやりな
がら、人間としての素質をどうしてのばすかということを通
剣に工夫し、学校の教育の課程の上で、それをどう調和する
かという問題を実際に考えているのであります。

英国のやり方が良いかどうかということは問題ですが、日
本の大学でも、むしろこのへんで、職業教育を行なう大学と
いうものの意味を考え直していったらどうなのでしょう。

過去の教員というものがおかれた社会的な地位や、文部省の
統轄の下にあった師範教育やそれに対する論争などにとらわ
れないで、今後教育にたづさわる人を養成することを目的と
する大学が、どのような教育をしたらよいかということと思
いきって考え直していいことではないかと思うのです。

英国の場合、教師の人間としての教育と、幼稚園の先生と

しての専門的な教育との調和がとれていて、それにたづさわ
る女性は、幼児教育者になるという目的をはっきりともって
いるとともに、その人が人間として立派な婦人である。女性
であるという誇りをもっております。この両方の目的が達成
できるように編成されているという点で、英国は一つの良い
例を示しているのであります。そして専門学校、職業学校と
して、いぢめられているというようなことは毛頭ないので
す。むしろそういうはっきりした職業的な目的をもっている
大学では、就職なども良いのであります。

幼稚園教員の社会的地位

御承知のように、英国の幼児教育の機関は、始め私立の制
度として発達しました。最近になって、これがナショナル・
システム、すなわち、学校教育制度の中に編入されました。
教育としてみるときは、幼稚園から、小学校、中学校、高等
学校、大学に至るまで、同じ国民的教育制度の一環でありま
して、その間に軽重の差別はないわけでありませ。

同時に問題になるのは、社会政策的な意味における、保育
制度、託児制度との関聯であります。英国では教員の資格
においては、全く同一の程度が要求されています。ただ実際
はまだすべての養成所が三年制度になっているわけではな
く、二年課程のものも多くあり、一級免状とか二級免状とか
の区別はあると思ひませ。

所定の水準に達している養成機関の卒業生は、俸給その他の給与水準で、小学校、中学校、大学の教育と少しも違いません。むしろ、私立の幼稚園などで非常に財政上豊かな場合には、小学校や、中学校よりもずっと高給をもってむかえられるという場合もあるようです。ここに述べた養成所も、学生数を三百人に限定していることは、相当志望者が多く、試験もなかなか厳しいことを示すものでしょう。この点、日本の場合には、なかなか面倒な問題があるようですが、幼稚園であろうと、高等学校、大学であろうと、教育としての差別があつてはならないものだと思います。そして英国においては、一定の同じ条件に該当した卒業生は、中学校、高等学校の先生に比べて、待遇上の差別はないと云つて誤まりはないと思います。

教科のシラバスについて

幼児研究にあたる人が、勉強しなければならぬ講義の内容とか、あるいはそれに関する学説とかいうことについては、講師の先生、あるいは教授の間で、必ずしも意見が一致していないようです。教師にとつても、学生にとつても、各人がある学説をどういう風に解釈し、批判するかという点については、それぞれの人の自由がなければならぬ。学生としても、いろいろ違った学説や、解釈の仕方を知つて、批判的に見るということは重要ことであります。

それでは各講座で取扱われ、教えられることは、担当講師の恣意に任せられ、その間に統一や調和がなくてもよいものかという点、決してそうではないでしょう。学生としては、いろいろ違った学説や見解を知つて、その矛盾を自分で克服していく能力をつけることが必要ですが、頭の中に不消化なもの残り、不消化な知識しかもたないときには、人間教育においても、職業教育においても、非常な損失だと思ひます。それでは、講師及び学生の自由を保ちながら、しかもその間に調和と統一をもつて進んでゆくのはどうしたらよいものでしょうか。

それに対する若干の答が、このフレージャー・エドケイシヨナル・インスティテュートのシラバスに見られます。シラバスとは、コース・オブ・スタディーのようなものであり、その大学で扱われる講座内容のかなり詳細な細目及び意義が含まれておきまして、各講義、又は演習の目指すところ及び、そこで論じられる内容の細目を盛つたものであります。(註)つまり、講師も学生も、自分の講義の全体の教科課程における意味と地位というものを知つていなければ無駄が多いことになります。教え又は学ぶ内容については、講師によつて見解の相異はあるにしても、どういふ事柄について学ぶかという点については、講師の間に一致するはずであります。もちろん、先程も申しましたように、学説について、すべての

先生が一致するように教えてくれというものではありませんし、その点については、意見の相違がありうるのは当然だということ、再び強調しておかなければなりません。

要するに、私がここで特に強調したいことは、シラバスというような講義内容のかなり詳細な道標をつくることによつて、学校がそのコースをおいたについては、どういふことを先生に要求しているか、また学生に対してはどういふことを要求しているかを明瞭にさせる必要があるということです。

この点、日本の大学はまだまだ親切でないと私は思っています。学生も自分の習うべき学問の範囲を知らないで教わっている場合があるかもしれません。特に職業教育を目的として、教員を養成するという使命をもった施設においては、その大学全体の目的と、その職業教育とがどのようにに關聯しているのか、そのコースは最終の目的にどのようにつながっているのか、というのを、先生にも学生にもよく分るような形で整えることが大変に必要なのではないのでしょうか。このように親切なシラバスを作ることを考えてみたいということ、を痛感致しております。

お茶の水女子大学、臨時幼稚園教育養成所について

さて、英国の場合を見まして、ここのお茶の水女子大学に附設されている養成所を見ますと、先づ第一に目につくことは、そこに臨時という名の附せられていることでありま

す。臨時というのはいったいつまでなのでしょう。どうもそういう点がはっきりしません。何故臨時ということばをつけておく必要があるのでしょうか。臨時をとることができないとするなら、その理由をはっきりさせる必要があると思えます。

英国は、人口四千万五百万しかありません。その英国と、八千万の人口を擁している日本とを比較するならば、日本としては、その規模において少なくとも倍の養成機関を必要とするわけがあります。そうとすれば、幼稚園教員養成所の制度を、もっとしっかりした基礎の上において、学校制度として、ちゃんとした位置を与える必要があると思えます。そして、できるならば、これを三年課程の養成所としたいと思います。このことを強調する必要があると感じたのであります。

幼児教育の内容については、何も知らない門外漢の私が、僅か半日でありますけれども、とにかくロンドンの郊外まで行って、お前の国ではどうかと質問されたら困ってしまうような無知な状態で、いろいろと尋ねてきたのですから、多くの誤りもあるうか、と存じますが、どうかその熱意を買っていただきたいと思います。その意味でここにお話し申し上げた次第です。

〔註〕

ロンドン大学、フレイベル・エデュケーション・インスティテュートのシラバスは、大きく別けて、大学としての教授要目と、三年課程の養成所としての教授細目との二つの部分から成っている。

大学としての教授要目の中で、まづ一般的注意として、シラバスの意味するところが明記されている。すなわち、各講座で取り扱かう内容は、その学生の種類、講師の興味、経験、希望等によって見方が違うのであって、講師間に完全に一致を見ようとするとは誤まっているし、その詳細な教え方を規定するものではないということが強調されている。しかし、各コースにおいて、どのような一般的題目が含まれねばならないかという点については、一致した見解がみられるはずであり、それがシラバスであることとわつてある。したがって、その題目の中で、それがどういふ順序で教えられ、どういふ風に研究が進められ、どこに強調点がおかれるかということは、個々の講師の良識に委ねられているのである。

大学の教育課程は概略四つの部分に分れている。すなわち、一般教育原理、教育の歴史、心理学、及び健康教育である。ここでの主目的は、学生の心を、教育の基本問題に向けること、また、教育の理論と実際とが、豊かに関聯しあうように、生涯を通じてその問題を考へる端緒を開いてやることにあるとしてゐる。

上の四つの部門について、それぞれのコースの目指す所、その取扱かう主題目が詳細に述べられ、試験の方法まで指示してある。

三年課程のコースは、上の大学の教授要目に準じて、それと重複しながら、更に詳しく述べてある。ここでは、大別して、教育専門課程と、専門教課（カリキュラムコース）と、特殊課程の三つに分れている。

教育専門課程は、教職のための、教育全般に関することを含む。細別すれば、第一に教育の原理の課程、ここでは、児童の発達及び心理学が主となつて、児童心理学の各分野が網羅されている。ただしこれはあくまでも、教育の実際の理解に役立つことを旨としている。第二は教育実習であり、ここでは、児童の觀察にもとづき、児童が探索と創造的活動とによつて、環境から学んでゆくようにするのに必要な技術を身につけることを目的として、その方法が示唆されている。第三は健康教育の扱かう細目、第四は教育理念の歴史で、特にフレイベルが強調されている。第五は体育、第六は宗教教育の細目である。

専門教科の部は、各教科の内容について、当該年令の児童を頭において、その教育に必要な範囲においてとり扱われるべきことが強調されて、前と同様にその細目が挙げられている。ここには、美術及び手技、地理、歴史、数学、音楽、博物学、宗教知識、英語が含まれている。

特殊課程は選択課程であり、主として学生の個人的な人間としての発達のために設けられたものであって、必ずしも教職と直接には関係のないものである。これは、一年の後期から始められて、三ヶ年を通して行なわれる。そこで用意されているコースは、美術（絵画及び彫刻）、英語、地理、歴史、数学、博物学、陶器及び図案、宗教知識及び織物であつて、それぞれその細目が挙げられている。

（お茶の水女子大学学長）